

第Ⅳ章 総括

第1節 出土遺物の位置づけ

村東遺跡から出土した遺物は、概ね平安時代から鎌倉時代にかけての時期に比定できる。本文及び観察表においては、土師器の変遷に基づく時期区分を記している。ここではその根拠を呈示し、当該期の遺物の様相について説明する。

播磨地域においては未だ、古代から中世にかけての土師器の編年観・変遷観は確立していない。そのため、播磨地域では遺構の時期を決定するため、窯跡出土の須恵器の変遷観から年代的な位置づけを行なってきた。また、綠釉陶器や黒色土器、瓦器等といった遺物が共伴する場合はそれにより年代を補強している。

当該期の須恵器については、西播磨の相生窯跡群、東播磨の志方窯跡群、神出窯跡群をはじめとする諸窯において生産され、各窯において編年研究が早い段階から行われてきた⁽¹⁾。これらの諸窯は、総体的に同じような変遷をたどるが、東播系に対し、「西播系」の存在も指摘されているように細部においては異なっている⁽²⁾。近年では東播磨系須恵器について消費地からの検討も進められ、その様相は徐々に明らかになってきている⁽³⁾。

村東遺跡の所在する中播磨地域では、地理的に西播磨と東播磨の諸窯から須恵器がもたらされていると考えられる。出土遺物を窯跡で構築された編年に照らそうとする場合、破片資料の類似度等をもとにいずれの窯の資料であるかを特定し、その位置づけを検討する必要が生じる。ただ、現状では消費地において出土する資料を明確な基準に基づき同定を行うことは非常に困難である。こうした状況を考慮して、本報告では土師器による変遷観を設け、出土資料を位置づけていくこととした。播磨地域の土師器については少なからず検討されているものの、資料数の絶対的な少なさから古代から中世への変化は未だ未解明な部分が多い⁽⁴⁾。村東遺跡においては土師器とともに黒色土器や綠釉陶器、瓦器等が出土しているが、包含層からの出土が多く、遺跡内で土師器との共伴関係が把握できる資料は出土していない。そのため、やや迂遠ではあるが播磨地域において現在知られている資料を基に当該時期の土師器の様相を整理し、年代比定を試みる。

検討方法

播磨地域では当該期の資料が極めて少なく、検討を行う上で十分な資料数が得られないこともこれまで研究が進んでこなかった要因の一つであるものの、資料がないわけではない。まずは、既往調査で得られた資料をもとに当該期の組成を明らかにし、その上で編年的位置づけを確認することにする。

検討資料については、消費地出土資料のうち比較的一括性が高いと思われるものを選択した。ただし埋納遺構等の確実に一括性が担保される資料はなく、土坑、溝等の資料が中心である。また、ある程度の量がまとまって出土し、組成が捉えられる点にも注意した。組成の検討にあたっては、東播磨と西播磨とに分けて検討した。西播磨は市川流域以西、東播磨は加古川流域以東の地域とし、北播磨は東播磨に含めた。西播磨26例、東播磨27例である。これらを報告書の記載に基づき分類した。また、記載がない資料については実見の上、記載したものもある。

分類の基準は以下のとおりである。

1. 器種は皿(托皿を含む)、杯、椀に分類した。
 2. 高台形態でⅠ. 無高台、Ⅱ. 平高台(托皿を含む)、Ⅲ. 輪高台の3種に分類とした。
 3. 底部の観察からA.指圧痕未調整(非クロコ成形)、B.ヘラ切り、C.糸切り、D.手づくね(本来的にはAに含まれるが区分した)の4種に分類とした。
- これらの組み合わせにより各遺構の組成を把握した。

東播磨の土器様相

東播磨における組成は以下のとおりである。

表32 東播磨の土器様相

遺構名	土器組合												器種組合																				
	皿			杯			碗			皿			杯			碗			皿			杯			碗								
	無高台 指(ヘラ) 無(ヘラ)	無高台 糸(ヘラ) 無(ヘラ)	無高台 輪(ヘラ) 無(ヘラ)																														
上高瀬跡 第1遺構 3K02下半層	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+							
高瀬跡 1次遺査 3K01							2						1																				
白木遺跡 4次 3K02下半層							1																	1	2								
猪之口遺跡 K地区 3K00K	2						5		3	3									1	1	1	1	1	4									
室町・室ノ内遺跡 ピト1000													1	1											1	1							
上高瀬跡 H7地区 7K014SE	3						6		1	4	1													1	3								
白木遺跡 2次第3トレンチ 3K02	2						3		2	3													2	3									
猪之口下高瀬跡 SK236							2		1	1	5	1												1									
上高瀬跡 H7地区 7K012SK	2										1	1											2	1									
菅原井・野乃遺跡 A地区 SK1002							2		1	3														4									
戸山遺跡 3区 SK12							1		2																2								
白木遺跡 4次 3K02	1	6		1						1	4	1	1									8		4									
今治瓦窯跡 4次 SK401		9											6										1	1									
朝原・上井の後高瀬跡 4次 土井1	8	4								1	1		1	1										10									
大野遺跡 南地区 3K40	3			1			2		2						12	1								6									
朝原・豊田田中遺跡 A地点 SK01	1						2																		2								
玉津田中遺跡 第4次 3K101	15		1	4		1							19	5			3						23										
籠木・日向 1次 SK02	1	2				2							1												1	1							
今治木窯跡 A-1地区 土井1	65						10						12											5	4								
籠木・日向遺跡 12 SK04	2	7																								4							
玉津田中遺跡 江之内地区 SK85001	30	44					50		1	11														21									
玉津田中遺跡 区 3E E5001上高瀬跡	14	1					5			2															2								
白木遺跡 34次第5回H4区 SK54001	2																									10							
上高瀬跡 HTA地区 7K027SE	20	16								26															5	12							
福住遺跡 301(落ち込み)	2	23								3															2								
上高瀬跡 HTA地区 7K044SK	2	4								2															2								
上高瀬跡 7K049SK	2	3								3																							

上表によれば土師器皿は指圧痕未調整、ヘラ切り、糸切り、手づくねが存在する。土師器杯は指圧痕未調整、ヘラ切り、糸切りがあり、土師器椀には指圧痕未調整、ヘラ切り、糸切りがある。

上表は、全時期を通じて出土する土師器皿を基準にして配列している。土師器皿は指圧痕未調整→ヘラ切り→糸切り→手づくね成形の順に変遷するものと想定する。表に基づけば土師器杯はヘラ切り→糸切り、土師器平高台椀はヘラ切り→糸切り、輪高台椀は指圧痕未調整→ヘラ

切り→糸切りの順に底部調整が変化する。それぞれの変化するタイミングは同時ではないが、変遷の過程は皿の変遷と矛盾するものはない。また、この変遷は須恵器碗において既に指摘されているヘラ切り→糸切り、平高台→無高台の変遷とも矛盾しない。

西播磨の土器様相

西播磨における土器様相を東播磨と同様の配列で呈示する。

表33 西播磨の土器様相

遺跡名	工房期												河原期														
	西			北			東			南			西			北			東			南					
	無高台 直(へり)丸 平 浅(あさ)	無高台 直(へり)丸 深(ふか)	無高台 直(へり)丸 高(たか)	無高台 直(へり)丸 低(ひさ)	無高台 直(へり)丸 高(たか)	無高台 直(へり)丸 中(なか)	無高台 直(へり)丸 低(ひさ)																				
竹原遺跡 全面調査区 A35土坑	1	3		2			3			3			2	4													
本町遺跡 D地区2番3次道路発 潜2-02	2				3		2																		2		
丹波今里跡第 第4層	8					62		3																			
丹波今里跡第 第3層	3				58		6																		4		
本町遺跡 大字野分塚 土坑	6				8		1																				
上原田遺跡 SE01				3		1																			1		
本町遺跡 D地区城内構46(5) DK-03	4		4	1	2			2			1																
宮崎遺跡 Eブロック DK1	2				2		2			2			1												2		
小丸丸遺跡 第10個査区 瓦塚め7西	1		1	10	10			2	1	10															7		
小丸丸遺跡 第20個査区 瓦塚め3				1	4			1		5																	
小丸丸遺跡 瓦塚め2				2	13			5		14															1		
小丸丸遺跡 第1個査区 瓦塚め1	1			2	10			3		11																	
宝井寺北遺跡 土坑A2	30		1	2						4																	
宮崎遺跡 Eブロック万地地区 DK1	5	8				1	13			1														4	1		
宮崎遺跡 Eブロック三日坂地区 DK3				2																						2	
宮崎遺跡 Fブロック3号地区 DK	2	3				1												1								3	
宝井寺北遺跡 8地区 SE01	9	1		1	17	17				1														3	2		
佐之根遺跡 E区 SK08	28				4	1				6														3	21		
長尾谷遺跡 140土坑		19	5			8																				7	
櫛田天神遺跡 SK08	4	5	14																							11	
宮崎寺北遺跡 A地区 SK01	2	1								1																	
長尾谷遺跡 122土坑		4																									1
生納遺跡 畠井遺構	14	10	7			22																					
佐之根遺跡 A区 SK09			19																							1	3
櫛田片岡遺跡 TE19			4																								
宮崎遺跡 Dアカナ ST01			8																								

西播磨においても土師器皿を基に組成を整理すると、東播磨で確認した変遷過程と大きな矛盾ではなく、それぞれの出現する順序は同じである。ただし、土師器皿と土師器杯においてヘラ切りが残存し、手づくね成形の土師器皿と共にしている点が大きく異なっている。

播磨地域の土器様相

東播磨と西播磨において土器の変遷は細部で異なる点もあるが、概ね一致している。このことから土師器皿の変遷に基づいて、表34のように底部指圧痕未調整の段階をⅠ期、ヘラ切り皿の出現をⅡ期、糸切り皿の出現をⅢ期、手づくね皿の量的出土をもってⅣ期とした。

表34 播磨地域の土器様相

東播磨							西播磨						
時期	土師器皿	土師器杯	平高台椀	輪高台椀	直裏器杯口	直裏器碗	時期	土師器皿	土師器杯	平高台椀	輪高台椀	直裏器杯口	直裏器碗
I期古	口・(ヘラ)	口・ヘラ	口	○	○	—	I期古	(口・ヘラ)	ヘラ	口	—	○	—
I期新	口	ヘラ	ヘラ	ヘラ	○	ヘラ	I期新	口	口	—	—	—	ヘラ・角
II期古	ヘラ	ヘラ	ヘラ	○—渦底	ヘラ	—	II期古	ヘラ	ヘラ	ヘラ	—	—	ヘラ・(角)
II期新	ヘラ	ヘラ	ヘラ	ヘラ	口・(ヘラ)	—	II期新	ヘラ	ヘラ	ヘラ	口・(ヘラ)	—	角
III期古	角	角	角	角	—	角	III期古	角	—	—	—	—	角
III期新	角・(手)	角	角	角	—	角(手)	III期新	ヘラ・角・(手)	ヘラ・角	角	—	—	角(手)
IV期古	角・手	角	角	角	—	角(手)	IV期古	手・ヘラ・角	ヘラ・角	角	—	—	角(手)
IV期新	角・手	角	角	角	—	角(手)	IV期新	手	—	—	—	—	角(手)

※ ○ は存在が予想されるもの、もしも出土量が少ないものを示した。

さらに各器種の消長により細分を行う。I期は平高台椀の有無(須恵器も含む)で2時期に分ける。II期は糸切り平高台椀の出現により2時期に分ける。III期は輪高台椀の消長により2時期に分ける。IV期は平高台椀の消長と手づくね成形の土師器皿の形態変化によって2時期に分けた。それぞれ古段階と新段階とする。

東播磨、西播磨とともにII期古段階に全ての器種でヘラ切りが採用され、III期古段階に全ての器種が糸切りを採用するようになり、製作技法上の画期が想定できる。ヘラ切りもしくは糸切りへの変化は椀形態が先行し、皿と杯が一段階遅れて採用されている。III期新段階に手づくね成形の土師器皿、いわゆる「て」の字状口縁が東播磨・西播磨ともわずかに認められるが、いずれも客体的な存在である。西播磨においてはIII期以降、土師器皿と杯にヘラ切りが残存し、東播磨とは様相が異なってくる。須恵器は、III期新段階に平高台椀から無高台椀への変化が認められる。

各期の様相

皿と椀形態を中心に各期の様相を整理する。

I期古段階は、神戸市上池遺跡SX02の資料を指標とする⁽⁵⁾。本資料の皿は、指圧痕を残す非ロクロ成形の皿とロクロ成形の皿が確認できる。このうち非ロクロ成形の皿は口縁部を外反させる1と直線的に外方へ延びる2がある。1は外反する口縁端部をわずかに摘み上げており、この器形の皿を古代からの系譜で捉えることができる。ただし、こうした口縁部の皿は多くなく、大半は端部を丸くおさめたものである。ロクロ成形の皿3については、一見生焼けの須恵器に近く、直線的な底面に外傾する口縁部を持つ。この器形は本時期以降確認できず、II期の土師器皿に系譜上つながらないと考える。輪高台椀は4のように短く低平な輪高台を貼り付け、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。口縁端部はシャープにおさめる。

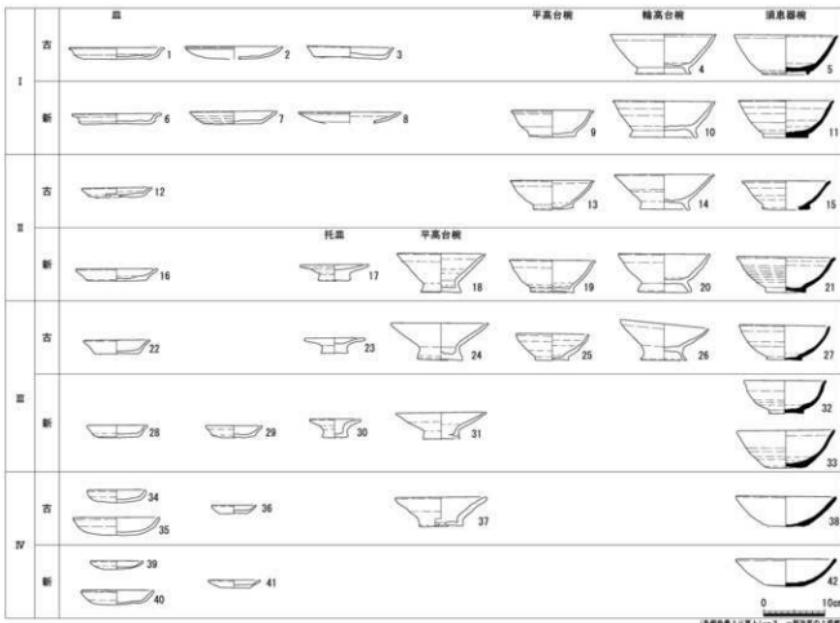
I期新段階は、姫路市円教寺薬師堂の2層及び4層の資料を指標とする。本資料の皿は全て底部に指圧痕が認められる非ロクロ成形である。外反する器形6と直線的に外方へ延びる器形7・8がある。前者の器形には上池遺跡で認められた端部の摘み上げは認められない。外反度合いには強いものと弱いものがある。後者の器形については少量の出土で、本時期以後ほとんど認められない。

椀は10のように粘土紐巻上げにより成形し、器形は内湾気味もしくはやや直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁部のナデが強くなり、凸凹が目立つ個体も存在する。上原田遺跡や本町遺跡(大手前公園)では、直線的に外方へ延びる器形のものが出土しており、後述するII期古段階との中間的な様相を呈している。平高台椀は円教寺では出土していない。平高台椀9は溝之口遺跡K地区SD003Kの資料を提示した。SD003Kは微高地の段差に沿った数本の溝の一つであり、厳密には一括性の担保はしがたく、参考資料として扱う。底部は回転ヘラ

切りで内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。

II期古段階は、上脇遺跡H7A地区73016SEを指標とする。本資料の皿12は回転ヘラ切りで口縁部が外反する。資料数が少ないため断定はできないが、I期ほど外反度の強い口縁部を持つ個体は見られない。ヘラ切り皿の法量は、口径9.4~12.2cm、器高1.4~2.2cmである。輪高台椀14は体部が直線的に外方へ延び、内面は平滑に仕上げる。この器形は次の段階では認められないことから当該時期の指標となる。ただ、西播磨ではこの時期に位置づけている本町遺跡や宮脇遺跡から輪高台椀が出土していないため、その様相は不明である。本町遺跡からは柱状高台の托皿が出土しており、本時期以降托皿が出土する。

II期新段階は、小犬丸遺跡第20調査区瓦溜め7西及び第21調査区瓦溜め5を指標とする。この段階の皿の器形は16のように外反するものが主体的である。ヘラ切り皿の法量は、口径11.8~13.4cm、器高1.7~2.5cmである。平高台椀は前段階からの器形19と新たな器形18が出現する。18は小犬丸遺跡の椀C1と呼称されるものである⁽⁶⁾。体部は直線的に延び、見込みが大きく凹む器形でこの段階から出現する。輪高台椀20の底部は、輪高台の貼付け時等のナデが施される。そのため切り離しが判明する個体は少ない。数少ない個体から判断すると糸切りが優勢になる



1~5: 上池遺跡 SX02, 6~7~10~11: 円教寺裏師堂第2層, 8: 同第4層, 9: 清ノ口遺跡 K地区 S2003K, 12~15: 上脇遺跡 H7A地区 73016SE。

16~18~19: 小犬丸遺跡第20調査区瓦溜め7西, 17~20: 小犬丸遺跡第21調査区瓦溜め5, 21: 宿原寺ノ下道路 SK236, 22~24~27: 大野遺跡 SK40, 23: 宝林寺北道跡土坑 42, 28~29~31~33: 宮脇遺跡A ブロックIV地区 SK1, 30: 宝林寺北道跡 B地区 S501, 34~38: 玉津田中遺跡 S085001, 39~42: 上脇遺跡 H7A地区 72027SE。

図103 播磨における土師器変遷図 (S=1/8)

とみられる。また、輪高台部分が前段階に比べ高くなる傾向があり、高台部分を強調した例も認められる。托皿は17のように柱状高台を持つものが出土している。

Ⅲ期古段階は、大野遺跡南地区SX40を指標とする。皿は糸切りで外反する器形22を呈示したが、器形には外反するものと直線的に外方へ延びるものがある。法量は、口径8.5~11.6cm、器高2.0~2.4cmである。輪高台椀は26のように高台部の貼付け位置が高くなり、高台部が強調されたものとなる。出土量は少ない。平高台椀は24の器形と25の器形が存在するが、いずれも本時期以降出土量が減少していくとみられる。托皿は23のように柱状高台を持つものが出土している。西播磨では宝林寺北遺跡土坑42を土師器平高台椀・托皿の様相から当該期に位置づけたが、当該期の資料数が少なくその位置づけについては流動的である。

Ⅲ期新段階は、西播磨では宮脇遺跡AブロックIV地区SK1、東播磨では与呂木遺跡A-1地区土坑1を指標とする。皿については、西播磨では28のような糸切り皿、29のようなヘラ切り皿が出土する。東播磨では糸切り皿が主体的である。この段階の糸切り皿の法量は、口径8.4~12.8cm、器高1.4~3.5cmである。ヘラ切り皿の法量は、口径8.0~10.4cm、器高1.4~2.4cmである。托皿はこの段階で30のように内面底部が深く凹み、高台部の器壁が薄い器形が出土する。柱状高台の托皿の有無については両者の共伴資料がないため現状では不明である。平高台椀は31のように椀C1で、前段階と比較して器高が低くなる。消費地から出土する須恵器については、この段階で32・33のような平高台の須恵器椀と高台が痕跡程度となる須恵器椀が共伴する。呈示したのは、西播磨の宮脇遺跡の資料であるが、東播磨においても森田編年のI-1期からI-2期の移行期が当期に該当している。

Ⅳ期古段階は、玉津田中遺跡SG85001を呈示した。手づくね成形の皿34・35、糸切り皿36がある。手づくね成形の皿は丸みを帯びた器形で法量は大きく2分化する。法量は、小皿で口径7.8~9.9cm、器高1.2~2.0cm、大皿で口径11.9~16.2cm、器高2.2~3.2cmである。糸切り皿の法量は、口径7.0~9.0cm、器高0.8~1.8cmである。前段階に比べて糸切り皿の法量は小さくなる。西播磨におけるヘラ切り皿の法量は、口径7.3~9.3cm、器高1.2~1.7cmである。資料群を総体的にみた場合、糸切り皿とヘラ切り皿の小形化がⅢ期とⅣ期を画す一つの指標となる。平高台椀は出土数が極めて減少し、この段階以降ほぼ認められなくなる。托皿についても本時期以後、確認できていない⁽⁷⁾。

Ⅳ期新段階は、上脇遺跡H7A地区72027SEを呈示した。組成上はⅣ期古段階と大きく変わらない。手づくね成形の土師器大皿の器形が丸みを帯びたものから、体部の立上がりがやや角張り、外面をナデにより凹ませるもののが出現するのを指標とした。手づくね成形の皿39・40、糸切り皿41がある。手づくね成形の皿が主体となり、糸切り皿は減少する。西播磨ではその傾向は更に顕著となる。法量は、小皿で口径7.4~8.8cm、器高1.0~1.8cm、大皿で口径11.0~13.5cm、器高2.4~2.7cmである。糸切り皿の法量は、口径7.5~8.2cm、器高1.3~1.8cmである。法量は、古段階に比べて縮小傾向はうかがえるが、総体としては大きく変わらない。

以上、4期8小期に分け、時期ごとに様相を俯瞰した。当然この小期の中にも時期差が存在することとは承知しているが、現状ではそれを型式学的に担保できる資料数ではないことから本稿ではこれ以上の細分を行っていない。また、土師器から変遷を捉えることを主眼としたため、研究の蓄積のある須恵器についてはあえて参考程度としたことを付記する。

時期の比定

上述した各期の具体的な年代を検討していく。I期については、I期古段階の上池遺跡の資料が出土須恵器から札馬II型式に位置づけられている⁽⁸⁾。I期新段階にあたる円教寺薬師堂の遺物については、これまで10世紀中頃から後半とされ、円教寺創建年代と整合することから播磨における年代の一つの定点資料として扱われていた。しかし、近年の検討により、共伴する遺物の年代から下っても10世紀中頃までにおさまる可能性が指摘されている⁽⁹⁾。円教寺の資料と類似するのが第Ⅱ章第2節において呈示した辻垣内遺跡である。ここでは9世紀末頃に位置づけられる篠産の鉢Cが出土している。この資料は前述したように一括性を保った資料ではないが、I期の年代を考える上で参考となる。円教寺資料は型式的にも上池遺跡の資料との連続性がうかがえる。のことから、円教寺資料の前段階にあたる上池遺跡の資料を、これまで指摘されている9世紀後半に位置づける。

II期の年代を考えるうえで、加東市の木梨・北浦遺跡の天禄三年(972)の紀年をもつ巻数板周辺から出土した資料があげられる。ただし、これらは木簡と共に共伴する資料ではなく、木簡を被覆する埋土もしくは包含層の資料である⁽¹⁰⁾。この資料中に底部を欠損しているが、立上がりの脇にヘラの痕跡を残す皿が含まれている。土師器椀はヘラ切りと糸切り、土師器杯もヘラ切りと糸切りの双方が確認でき、様相としてはII期新段階に近い。ただ、一括性のある資料ではないため、II期のある時点に10世紀後半が含まれると認識しておきたい。

次に白水遺跡4次SX03が挙げられる。この資料も時期幅のある資料で一括性を担保できないが、土師器皿と椀に限ればIII期古段階に該当するとと思われる。この資料中の軒丸瓦が神出窯万堡池支群出土瓦と同範とされ、平安京民部省に瓦を供給した神出窯梶谷1号窯に先行する位置づけがなされている⁽¹¹⁾。こうした播磨系の瓦の京都・奈良への供給は11世紀後半頃と考えられている⁽¹²⁾。のことからIII期古段階の一点を11世紀後半に位置づけることができる。

III期新段階の年代を考えるうえでは、久留美・跡部窯跡群柳谷2号窯灰原出土資料が参考になる。当該窯では、天仁二年(1109)に造営された鳥羽離宮に使用された瓦がもたらされており、12世紀前半の年代が与えられている⁽¹³⁾。須恵器と土師器を焼成しており、土師器は回転糸切りの皿、中空の托皿、平高台椀が焼成されている。このうち回転糸切り皿については与呂木遺跡と類似し、距離的にも近く需給関係が想定できる。のことからIII期新段階の一点を12世紀前半と考えることができる。

以上から、I期古段階を9世紀後半とし、以後の年代を暫定的に均等に割り振ればI期新段階が10世紀前半、II期古段階が10世紀後半、II期新段階が11世紀前半、III期古段階が11世紀後半、III期新段階が12世紀前半、IV期古段階が12世紀後半、IV期新段階が13世紀前半となる。先に示した年代根拠とも大きな齟齬は生じていない。ここで呈示した年代観は、これまでの先行研究で示されたように、須恵器の年代観に基づくものではない。須恵器については前述したように参考程度の扱いとし、個別に整合を図ったものではない。しかし、図103に示したように須恵器の変遷についても大きく矛盾するものではなく、本書で呈示した土師器の変遷観について大枠では認めよう。各期の年代比定については、時期を均等に割振る根拠はなく、あくまで現状での参考年代として呈示している。当然ながら、それぞれ前後にまたがる年代幅を内包していることは予想され、型式学的検討も含めて今後の課題であるが、ひとまず播磨地域における平安時代の土師器の様子を整理し、呈示した。本書では上述した根拠に基づき、時期区分を設定し村東遺跡出土資料の位置づけを行った。

第2節 村東遺跡の変遷

前節で検討した時期区分に基づいて、各遺構の時期を比定した。ただし、本遺跡の遺構は柱穴が中心であるため、明確に時期を決めることできた遺構は少ない。そのため、包含層出土資料等を参考にしながら、遺構の変遷を述べることとする。

遺跡の中心範囲は図104に示したように東西方向は12-1区から9区までの約200m、南北方向は2区から10-1区までの約160mと推測される。そのうち遺構・遺物がまとまって出土しているのが4-1区、4-2区、5区、6-1区、10-1区、11区である。

建物跡は4-1区で6棟、4-2区で2棟、5区で1棟、6区で4棟、9区で1棟、10-1区と11区で9棟、12-1区で1棟検出され、計24棟である。幕は4-2区、6-1区、10-1区、11区、12-1区で計6基を確認している。

区画遺構は6-1区と11区で検出した溝と10-1区、11区で検出した溝または落込みがある。

井戸は4-1区で1基を確認した。

本遺跡においては、柱穴同士の切合が少なく、同一場所での建替えをほとんど行っていないという特徴がある。

図105は建物跡、井戸、幕を主軸方向で分けたものである。大きく西側に傾くものが4-1区で1棟、10-1区と11区で4棟の計5棟ある。正方位に近い北向きの建物跡は4-1区で4棟、12-1区で1棟の計5棟検出している。東に傾くものは14棟ある。建物の主軸は当時の集落の軸と一致していると考えられ、建物の傾きによって遺構の同時性を考えることも可能である。その場合、4-1区SB05がⅠ期新段階のSD17に切られているのを根拠に西傾→正方位→東傾といった変遷を考えることができる。遺跡の立地する自然堤防の主軸は、N110°~115°Wを測り、飾磨郡の条里方向に近い。このことから東傾する建物が自然地形に沿った形で建てられているといえる。次に図106には出土遺物により遺構を時期別に示した。まとまって遺物が出土した柱穴を持つ建物跡は少なく、厳密には時期を特定し難いが、各調査区において記述した遺物に基づき時期を与えた。

4-1区で検出した正方位に近い建物は全てⅠ期新段階に属し、10世紀前半の遺構である。12-1区SB01は北向きであるが出土遺物からは明確に時期を決め難く、12-1区ST01と主軸が違うことからⅣ期新段階に位置づけられる可能性が高い。

西傾する建物のうち4-1区SB05は出土遺物から概ね10世紀前半と考えられるが、SD17に切



図104 村東遺跡主要遺構配置図 (S=1/2,000)



図105 村東遺跡主要遺構 方位別配置図 (S=1/1,000)



図106 村東遺跡主要遺構 時期別配置図 (S=1/1,000)

られていることからより時期が遡る可能性は十分考えられる。10-1区・11区のSB02・SB06・SB07・SB08・SB09はⅠ期の遺物を含む柱穴もあるが総じてⅣ期古段階、12世紀後半に位置づけられる。

東傾する建物のうち、4-2区SB01とSB02については、SB01はⅢ期新段階、12世紀前半に位置づけられる。SB02はSB01よりも古く位置づけられるが、出土遺物がなく、嚴密には時期不明である。しかし、SB01と棟方向が概ねそろうことから大きな時期差はないと思われる。6-1区の建物は全てⅣ期古段階、12世紀後半に位置づけられる。5区・9区の建物跡についても概ね同様の時期と考えられる。10-1区・11区のSB01とSB04・SB05はⅣ期新段階に位置づけられる。

以上のように出土遺物からは、建物の棟方向は時期差ではなく、検出位置と関連するようにみえる。このことは包含層出土遺物にも端的に現れている。4-1区・4-2区といった北側の調査区にⅠ～Ⅲ期の土師器とともに縁釉陶器や黒色土器等の遺物が認められる。5区・6-1区・10-1区・11区といった南側の調査区からⅢ期～Ⅳ期の土師器とともに白磁・瓦器等の遺物が主として出土しており、建物の時期と概ね対応する。

表35 包含層出土遺物数量表

調査区	土師器(全数)			食膳具(全数)			調理具(全数)			貯蔵具(全数)			其他(全数)			合計											
	全数(a)	古期(a)	中古期(a)	全数(a)	古期(a)	中古期(a)	全数(a)	古期(a)	中古期(a)	全数(a)	古期(a)	中古期(a)	全数(a)	古期(a)	中古期(a)	全数(a)	古期(a)	中古期(a)									
1区	18	168	41	427	1	10	0	1	31	0	0	0	0	0	0	1,086	23	108	23	630	91(6%)	201(2%)	7	86	144	3,876	
2区	130	1,283	134	1,287	0	0	1	0	1	29	0	0	0	0	0	2,712	30	1,259	58	2,317	21(1%)	243(0%)	2	135	277	3,840	
3区	29	117	25	218	0	0	2	20	0	0	0	0	0	0	0	61	17	462	8	130	20(1%)	3,73(1%)	6	45	108	6,624	
4-1区	1,089	8,280	303	8,108	4	108	2	0	1	28	2	27	2	14	2,057	13,865	913	8,702	268	12,131	81(2%)	161(2%)	154	1,223	2,087	40,276	
4-2区	1,199	8,087	340	8,438	4	25	22	194	0	0	0	0	0	0	0	18,010	19,610	384	8,635	108	12,295	20(1%)	1,28(1%)	184	184	2,647	22,281
5区	73	387	118	388	0	0	0	0	2	69	0	0	0	16	30	198	1,226	37	1,246	31(1%)	21(1%)	240(2%)	11	43	213	3,972	
6-1区	429	1,087	581	2,758	0	0	1	0	20	289	1	50	69	285	1,080	3,082	140	2,877	62	3,235	31(1%)	561(4%)	25	183	323	13,016	
6-2区	118	417	118	768	0	0	0	0	2	150	0	0	0	11	58	14	388	89	488	21	718	4	312	27	112	142	2,017
7区	29	288	79	764	0	0	0	0	0	129	0	0	0	45	126	1,340	49	1,233	14	126	3	37	3	26	185	3,291	
8区	14	107	6	18	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	22	150	11	280	7	237	1(1%)	200(4%)	2	40	52	980	
9区	326	2,444	943	5,807	0	0	1	2	14	284	0	0	0	23	1,492	8,038	454	8,885	123	2,810	42(1%)	1,383(1%)	218	1,323	2,047	20,889	
10-1区	973	3,173	516	4,312	0	0	0	0	15	187	5	26	27	170	1,138	6,078	224	3,514	140	4,105	36(1%)	278(1%)	137	1,004	1,674	18,542	
11区	424	1,831	412	2,245	0	0	3	9	8	40	4	175	17	168	684	4,040	344	5,218	75	3,205	36(1%)	2,01(1%)	71	331	1,414	14,702	
12-1区	83	271	45	268	0	0	1	1	4	0	0	0	1	2	148	640	30	1,518	35	367	43	2,351	42	264	365	5,713	
12-2区	0	0	2	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	18	0	0	0	0	32	1,288	9	52	42	4,689	
12-3区	1	3	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	94	0	0	0	18(1%)	1,069(3%)	0	24	1,170	24	
合計	4,774	26,276	4,503	32,327	9	153	26	220	75	1,261	13	285	152	394	9,327	60,380	2,406	42,836	984	33,813	83	4,060	348	5,880	12,927	163,811	

包含層出土遺物は細片が多く、皿・杯・椀の器種識別ができる個体は少ない。識別できるものについては極力図化し、既に調査区ごとに示した。表35は本文中に掲載したものも含む包含層出土遺物の全数量を用途ごとに分類し示したものである。出土傾向としては、出土数の多い調査区に限れば、食膳具が60%以上を超え、調理具、貯蔵具の順となっている。このことから調査区ごとの時期差に対し、遺物組成には大きな変化は認められないことが指摘できる。つまり集落の性格は遺物組成から見る限り基本的に変化していないといえる。

検出した遺構の中心となる時期は、大きくⅠ期新段階とⅢ期新段階以降に分けられる。Ⅱ期に属す明確な遺構は少ないが、当該期の遺物も散見されることから集落そのものが断絶したのではないと思われる。本遺跡の特徴として柱穴等の切合いが少ないとあげられる。こうした点から同一場所で建替えを繰り返しながら集落が変遷したのではなく、図104に示した範囲の中で地点を微妙に変えながら集落が変遷していったと推測できる。

次に検出した墓についてみる。Ⅲ期新段階の4-2区ST01、11区ST01を初現とし、Ⅳ期古段階の6-1区ST01、それよりやや時期の下る10-1区ST01・ST02、Ⅳ期新段階の12-1区ST01の6基がある。このうち、木棺墓は11区ST01と6-1区ST01である。その他は埋葬施設が確認できず、土葬墓であったと考えられる。4-2区ST01と11区ST01は石材を用いており、共通性がうかが

える。続く6-1区ST01も同様の構造を指摘できる。4-2区ST01と6-1区ST01は建物跡の内側で検出された。概ね柱間の中間に位置し、墓の主軸も建物跡と揃っていることから屋内に築かれた可能性も否定できない。

11区ST01の西側は建物跡が希薄となり、時期はややずれるが集落を画する可能性のあるSX01にも近い。10-1区ST01とST02は詳細にみれば新旧はあると思われるが、2基が計画的に配置されている。これらの墓は軸方向から10-1区SB01・SB03に関連すると見られる。墓の南側には建物跡は存在せず、集落の境界とみられるSD06が存在し、11区ST01と類似した状況である。12-1区ST01はSB01と主軸を揃え、同時期とすれば屋敷に近接して墓が築かれたことになる。

こうした屋敷墓を成立させた要因は、在地領主層を対象として検討した勝田至によれば「①開発者の靈と土地(特に屋敷地)との結びつきという観念、②それを支えている屋敷・土地の所有と継承というイエ制度、③墓(死体)に死者の人格が残るという観念、の3つが複合」したものとする⁽¹⁴⁾。屋敷墓を考古学的に研究した橋田正徳によれば、屋敷墓が風習として成立するのは11世紀後半とし、建物に近接する屋敷墓1類、屋敷の内と外とを区画する場所につくる屋敷墓2類、2基の土葬墓が並んで作られる屋敷墓3類の順に変遷するとする。また、この変遷を通じ「中世的家」の成立を読み取ることが可能としている⁽¹⁵⁾。村東遺跡においてはⅢ期新段階から屋敷墓が出現し、橋田の分類に従えば、建物に近接して作られた4-2区ST01、6-1区ST01、12-1区ST01が屋敷墓1類、11区ST01が屋敷墓2類に該当し、2基の土葬墓が並ぶ10-1区ST01・ST02が屋敷墓3類に該当する。

こうした研究を参考にすれば、村東遺跡においてはⅢ期新段階、12世紀前半以降に「イエ」が成立し、当該時期を境に建物の軸方向も主として東に傾くことから、新たな集落の編成を読み取ることが可能である。

13世紀前半以降は、遺構・遺物とも確認できなくなることから集落が移動したと考えられる。基幹水路の前身と見られる6-1区SD03と12-2区SD01、8区・9区にみられる鋤溝の存在から遺跡周辺は耕作地として利用されるようになったと思われる。10-2区や12-3区の調査では遺跡と現在の集落との間には生活痕跡の希薄な部分があることが判明しており、生活の場は、現在の集落の位置に移動したものと想定されよう。

第3節 村東遺跡の位置づけ

村東遺跡では10世紀前半の遺構が確認された。当該期の建物跡は概ね正方位を取るもの、大きな規模のものは確認できない。遺跡の自然地形は、前述したとおり概ね飾磨郡の条里方向に近く、当該期の建物跡の棟方向は自然地形にそわざ極めて意図的である。当該期の遺構の性格を探る遺物としては、本町式軒丸瓦と風字硯があげられる。いずれも南部に位置する調査区から出土しているが、原位置を保ったものではない。本町式軒丸瓦はいわゆる播磨国府系瓦で8世紀後半の年代が与えられている⁽¹⁶⁾。そのため、直接的に当該期の遺構に関わるわけではないが、摩滅していないため近接して瓦を使用した施設があった可能性がある。風字硯の時期は不明ではあるが、文書作成に携わる階層の存在がうかがえる。それぞれ1点のみの出土であるため実証性を欠くが、緑釉陶器・黒色土器等の出土とともにこうした遺物が出土している点を積極的に評価したい。また、ほぼ同時期の資料が辻垣内遺跡でも出土している。この遺跡も村

東遺跡から伸びる一連の地形上に立地している可能性が高い。実態はなお明らかではないものの夢前川河口部に10世紀前半には村東遺跡や辻垣内遺跡といった集落が点在していた景観が復元できる。

『日本紀略』寛和二年(986)七月、花山法皇が書写山円教寺に性空上人を訪問した記載がある。円教寺文書『悉地伝』には、その時、花山法皇が「英賀河尻」から船出したことが記されている⁽¹⁷⁾。『播磨国風土記』の記載から村東遺跡や辻垣内遺跡を含む夢前川河口一帯が「英賀里」と呼ばれていたと推測されることは前述したとおりである。「英賀河尻」の具体的な所在を知ることはできないが、この時期、夢前川の河口部に点在する村東遺跡や辻垣内遺跡等の集落が、総体として「英賀」と呼ばれていた可能性は高い。

12世紀前半以降の集落については、新たな領主の下で中世的な「イエ」が展開・発展し、集落が再編された可能性を指摘できる。そうした記憶が山崎の氏神である野杉春日神社の勧進伝承に残されていると想像できる。村東遺跡は、狭義には近世以降に文献上に現れる山崎村の前身集落と考えられるが、広義には中世後半に史料上に現れる「英賀」の前身であり、平安時代の「英賀」、そのものであると位置づけることができるのではないだろうか。

註

(1) 例えば

- 中村 浩 1982 「考察」『札馬古窯跡群発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告7 加古川市教育委員会
2000 「平安時代以降の須恵器型式編年について」『中津倉』大谷女子大学博物館報告書第43冊
森田 稔 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号
森内秀造 1986 「平安時代の窯業生産-播磨地方の須恵器生産を中心に-」『北山茂夫追悼日本史学論集』歴史における政治と民衆』日本史論叢会
1995 「相生窯址群における編年の再考」『相生・縁ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第139冊
2011 「出土遺物の検討」『神出窯跡群Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第407冊
2015 「神出窯須恵器の生産地編年の再検討に向けて」『中近世土器の基礎研究』26
岸本一郎・森下大輔 1990 「東播北部古窯址群の基礎資料-西脇市南部及び加東郡北部に分布する奈良・平安時代の窯址群-」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論集』
野村展右 2001 「相生・龍野古窯跡群について-採集資料の紹介から-」『ひょうご考古』第7号 兵庫考古研究会
池田征弘 2003 「まとめ」『相生市・縁ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第253冊 等がある。

平安時代前期の須恵器については、森田1986において「古代須恵器」と「中世須恵器」の間をつなぐ「過渡期須恵器」と位置づけている。この時期の須恵器は、森内1995で述べるように「その形態の変化はきわめて乏しく、また、ゆるやかなもの」で、かつ、森田1986において「札馬・相生窯址群を比較するだけでも、東西での様相は異なっている」と指摘するように東播磨と西播磨で地域差が存在する。各窯において精力的な検討が行われているが、各窯を横断した検討は森内2011などで行われているものの、播磨全域を対象とした編年の確立は今後の検討課題である。

(2) 岸本道昭編 1999 「竹原遺跡」龍野市文化財調査報告22

(3) 日本中世土器研究会編 2015 「中近世土器の基礎研究」26

(4) 例えば

- 山仲 進 1989 「東播磨の在地系土師器」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会
橋本久和 1991 「畿内周辺の回転台土師器」『考古学研究』第38巻第1号 考古学研究会
菅本宏明 1993 「東播系須恵器出現期における浜坂国境地域の土器様相」『考古論集』瀬見浩先生退官記念事業会
宮原文隆 1994 「円満寺遺跡出土の土器類について」『円満寺遺跡』中町文化財報告7
2002 「平安時代末～中世前半の概要」『思い出遺跡群Ⅳ』中町文化財報告27

- 岸本道昭 1994「布勢駅家庵絶期の土器」「布勢駅家Ⅱ」龍野市文化財調査報告11
- 中川 渉 1996「中世の土器」「玉津田中遺跡 第6分冊(総括編) -田中特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-」兵庫県文化財調査報告第135-6冊
- 鷹柄俊夫 1997「播磨」「中世食文化の基礎的研究」国立歴史民俗博物館研究報告71
- 山田清朝 1997「平安～鎌倉時代の土器」「美乃利遺跡」兵庫県文化財調査報告第165冊
2010「まとめ」「大野遺跡」兵庫県文化財調査報告第380冊
- 山本雅和 1999「平安時代中期の土器と瓦」「白水遺跡第4次埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 甲斐昭光 2002「土師器皿の変遷について」「宝林寺北遺跡Ⅲ」兵庫県文化財調査報告第223冊
- 中井淳史 2007「中世播磨の土師器様相」「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～補遺編」全国シンポジウム
「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 等がある。

これらの先行研究のうち、橋本、菅原、鷹柄、中井を除く各氏が行ったものは、報告遺跡の位置づけのために検討されたものである。いずれも共伴する須恵器の変遷觀に基づき、土師器の器形分類や瓦器碗や瓦等の共伴資料の検討を踏まえ年代を探っている。検討の対象となっている資料は、「東播系」須恵器の出現以降の時期のものが中心である。そうした中で山田1997・2010では、大きくヘラ切り→糸切り→手づくねの変遷が捉えられている。また、甲斐2002では土師器皿の底部調整と須恵器碗の変遷を整理することで、ヘラ切り→糸切りへと変遷し、手づくねはその間一定量作ることが指摘されている。両者の検討は一遺跡もしくは近隣の遺跡を検討対象としたもので、本書では、これらの研究を参考とし播磨全域を対象とした。

こうした地域・遺跡に即した研究とは別に、橋本らをはじめとする各氏は、製作技法や周辺地域の動向を絡めながら大局的に播磨地域を俯瞰した研究を開拓している。主として平安時代前期を対象とした橋本1986では東播磨と西播磨で土師器の様相が異なることを指摘し、主として平安時代後期以降を対象とした中井2007においても土師器の変遷に西播磨・東播磨・北播磨において地域差があることが指摘されている。

- (5) 神戸市埋蔵文化財センターにおける実見による。本資料は質・量に恵まれたもので、報告書に記載された以上にバリエーションが豊かである。表32には実見により観察できたものを+として表記した。
- (6) 岸本道昭編 1994「布勢駅家Ⅱ」竜野市文化財調査報告11
- (7) 托皿の認定については報告者により異なり、図103-31・37については報告書では托皿に分類されているが、本稿では土師器碗とした。
- (8) 同資料については、報告書中では周辺の遺構を含めて平安時代前半(10世紀前半ごろ)に位置づけられており、前掲註4の橋本1991や菅本1993では9世紀後半としている。
- (9) 山本和子 2010「円教寺薬師堂」「姫路市史」第7巻 資料編考古
- 中井淳史・松木彩はか 2013「円教寺薬師堂の出土遺物」「播磨六箇寺の研究I-書写山円教寺の歴史文化遺産(一)」
- (10) 実見による。なお、本資料中の須恵器は東播北部古窯址群1段階の指標となっている鍋子1号窯址の年代推定根拠ともなっていることを森下大輔氏にご教示いただいた。
- (11) 池田征弘 2011「軒瓦の変遷」「神出窯跡群Ⅲ・神出鶴谷1号窯～3号窯・神出梶谷1号窯」兵庫県文化財調査報告第407冊
- (12) 上原真人 2014「古代の終焉と播磨の瓦生産」「明石の古代Ⅱ」発掘された明石の歴史展実行委員会
- (13) 池田征弘 1999「出土瓦の検討」「久留美・跡部窯跡群」兵庫県文化財調査報告第186冊
- (14) 藤田 至 1988「中世の屋敷跡」「史林」71巻3号
- (15) 橋田正徳 2004「中世前期の墓制・墓地・屋敷跡からみた中世前期の家・集落・社会-」「考古学の語る中世墓地物語」第5回大谷女子大学文化財学科 公開講座
- (16) 今里幾次 1995「播磨古瓦の研究」
- (17) 姫路市史 2005「姫路市史」第8巻 史料編 古代中世

参考報告書

- 上池遺跡：神戸市教育委員会 1989「昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 長塚遺跡：加西市教育委員会 1995「長塚遺跡Ⅰ」加西市埋蔵文化財調査報告23
- 白水遺跡：神戸市教育委員会 1995「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 神戸市教育委員会 1999「白水遺跡第4次」
- 神戸市教育委員会 2000「白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書」
- 溝之口遺跡：兵庫県教育委員会 2006「溝之口遺跡」兵庫県文化財調査報告第309冊
- 家原堂ノ元遺跡：加東都教育委員会 1984「家原・堂ノ元遺跡」加東都埋蔵文化財報告5
- 上脇遺跡：兵庫県教育委員会 2002「上脇遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第233冊
- 兵庫県教育委員会 2002「上脇遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第233冊
- 宿原寺ノ下遺跡：兵庫県教育委員会 2004「宿原寺ノ下遺跡」兵庫県文化財調査報告第264冊
- 戸田遺跡：兵庫県教育委員会 2003「戸田遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第262冊
- 曾我井・野入遺跡：兵庫県教育委員会 2012「曾我井・堂ノ元遺跡、曾我井・野入遺跡、曾我井・沢田遺跡」兵庫県文化財調査報告第434冊
- 耗屋・土井の後遺跡：多可町教育委員会 2008「坂本・土井の内遺跡、坂本・クゴ田遺跡、耗屋・土井の後遺跡Ⅱ」多可町文化財報告5
- 大野遺跡：兵庫県教育委員会 2010「大野遺跡」兵庫県文化財調査報告第380冊
- 梶原・香丁田遺跡：加東都教育委員会 1994「埋蔵文化財調査年報」加東都埋蔵文化財報告15
- 柳谷2号窯：兵庫県教育委員会 1999「久留美・跡部窯跡群」兵庫県文化財調査報告第186冊
- 与呂木遺跡：兵庫県教育委員会 1994「与呂木遺跡」兵庫県文化財調査報告第133冊
- 出合遺跡：神戸市教育委員会 2011「出合遺跡」
- 垂水・日向遺跡：神戸市教育委員会 1992「神戸市垂水・日向遺跡第1・3・4次調査」
- 福住遺跡：神戸市教育委員会 1987「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 今池尻遺跡：神戸市教育委員会 1995「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 玉津田中遺跡：兵庫県教育委員会 1995「玉津田中遺跡 4分冊」兵庫県文化財調査報告第135・4冊
- 神戸市教育委員会 2000「玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査」
- 竹原遺跡：龍野市教育委員会 1999「竹原遺跡」龍野市文化財調査報告22
- 上原田遺跡：兵庫県教育委員会 1980「播但連絡有料道路建設にかかる埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」
- 本町遺跡：姫路市教育委員会 1984「本町遺跡」
- 姫路市教育委員会 2002「特別史跡姫路城跡-お城本町地区市街地再開発事業に伴う発掘調査概報」
- 姫路市立城郭研究室 2001「城郭研究室年報」Vol.10
- 円教寺薬師堂：水口富夫 1986「薬師堂出土遺物について」「1000年の歴史を秘める-書写山円教寺」兵庫県立歴史博物館
- 大手前大学史学研究所 2013「播磨六箇寺の研究-書写山円教寺の歴史文化遺産(一)」
- 宮脇遺跡：兵庫県教育委員会 1995「宮脇遺跡」兵庫県文化財調査報告第138冊
- 小丸遺跡：龍野市教育委員会 1992「布勢駅家」龍野市文化財調査報告8
- 龍野市教育委員会 1994「布勢駅家Ⅱ」龍野市文化財調査報告11
- 宝林寺北遺跡：兵庫県教育委員会 1987「宝林寺北遺跡」兵庫県文化財調査報告第49冊
- 兵庫県教育委員会 2002「宝林寺北遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第223冊
- 市之郷遺跡：兵庫県教育委員会 2011「市之郷遺跡Ⅲ」兵庫県文化財調査報告第406冊
- 生柄遺跡：一宮町教育委員会 1989「生柄遺跡Ⅱ」一宮町文化財調査報告5
- 福田天神遺跡：龍野市教育委員会 1982「福田天神遺跡」龍野市文化財調査報告書IV
- 長尾谷遺跡：龍野市教育委員会 1999「長尾・小畠遺跡群」龍野市文化財調査報告21
- 福田片岡遺跡：兵庫県教育委員会 1991「福田片岡遺跡」兵庫県文化財調査報告書第94冊

遺物觀察表

番号	種類	連携	規格	規格	日付	基準	最大値	規格	規格	特徴	地主	色調	特記事項(連携)
58	4-18	SP07	濃黒系	無	-	12.11	16.4	△2.25(横幅)	標準	黒、△-1mm以下の白色地を多く含む	NB/灰	濃黒及び、内外両面UVカット、耐候性計測C1	
60	4-18	SP110(別記)	上締縫	無	(12.4)	13.20	-	△2.0(横幅)	標準	△-3mm以上の、赤褐色やや多め	2019/11/26実施	耐久性向上、口縫合部UVカット、表面UVカット、口縫合部内面UVカット	
61	4-18	SP105	濃黒系	無	(14.0)	13.7	-	△2.0(横幅)	標準	△-3mm以上の白色地の、褐色系、黒色系等	NB/灰	濃黒ヘアライン、半透明感的、口縫合部内面UVカット、耐候性計測C1	
62	4-18	SP17	上締縫	無	(13.0)	12.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、乳白色地	2019/11/26実施	耐久性向上、高耐候性感、口縫合部UVカット	
63	4-18	SP146(別記)	濃黒系	無	(13.0)	16.4	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	濃黒ヘアリ、無風で名前が変換されない	
64	4-18	SP145	濃黒系	無	(12.4)	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地の、褐色系、黒色系等	NB/灰	内外両面UVカット、立ち上げ内面、口縫合部内面UVカット、耐候性計測C1	
65	4-18	SP161	上締縫	無	-	13.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、黒色地等	2019/11/26実施	内外両面UVカット、導電性感上手にやり感、強度計測	
66	4-18	SP169	本締縫	無	(4.0)	13.00	-	-	-	-	-	-	丸丸材、小寸法感
67	4-18	SP117(別記)	本締縫	無	(4.0)	12.0	-	-	-	-	-	-	丸丸材、小寸法感
68	4-18	SP044	本締縫	無	(3.0)	17.60	-	-	-	-	-	-	丸丸材、小寸法感
69	4-18	SP001(留丁下縫)	上締縫	無	(12.0)	13.0	-	△2.0(横幅)	標準	黒、△-3mmの白色地、赤褐色やや多め	2019/11/26~2019/12/31に亘る	耐久性向上、表面UVカット、内外両面UVカット	
70	4-18	SP001(留丁下縫)	濃黒系	無	(11.0)	3.85	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	濃黒ヘアリ、内外両面UVカット	
71	4-18	SP001	上締縫	無	-	12.40	9.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、内面UVカット、その他の荷台用UVカット	
72	4-18	SP001	濃黒系	無	-	12.0	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地の、黒色地少々含む	NB/灰	表面UVカット、内面UVカット、外側UVカット、耐候性計測C1	
73	4-18	SP001	濃黒系	無	(14.0)	3.4	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、外側UVカット、耐候性計測C1	
74	4-18	SP001	濃黒系	無	(4.0)	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地、褐色少々含む	2019/11/26	表面UVカット、内面UVカット、外側UVカット	
75	4-18	SP001	上締	無	(4.0)	16.1	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、白色地を多く含む	NB/灰	口縫合部、新規UVカット、内外両面UVカット	
76	4-18	SP001	上締	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、褐色少々含む	NB/灰	内面UVカット、表面UVカット、外側UVカット	
77	4-18	SP000	本締縫	無	-	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地の、黒色地少々含む	NB/灰	内外両面UVカット、内面UVカット	
78	4-18	SP000	濃黒系	無	-	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地を多く含む	NB/灰	口縫合部、内面UVカット、外側UVカット	
79	4-18	SP000	濃黒系	無	-	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、外側UVカット、耐候性計測C1	
80	4-18	SP004	本締縫	無	-	12.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mm以下の白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、耐候性計測C1	
81	4-18	SP001(留丁下縫)	上締縫	無	(12.0)	3.5	-	△2.0(横幅)	標準	黒、△-3mmの白色地、赤褐色やや多め	2019/11/26~2019/12/31に亘る	耐久性向上、表面UVカット、内外両面UVカット	
82	4-18	SP001(留丁下縫)	濃黒系	無	(11.0)	3.85	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	濃黒ヘアリ、内外両面UVカット	
83	4-18	SP001	上締縫	無	-	12.40	9.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、内面UVカット、表面UVカット	
84	4-18	SP001	濃黒系	無	-	12.0	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、内面UVカット、外側UVカット、耐候性計測C1	
85	4-18	SP004	上締縫	無	-	12.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mm以下の白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、耐候性計測C1	
86	4-18	SP001	濃黒系	無	(4.0)	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、新規UVカット、内外両面UVカット	
87	4-18	SP001	上締	無	(4.0)	16.1	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、白色地を多く含む	NB/灰	口縫合部、新規UVカット、内外両面UVカット	
88	4-18	SP001	上締	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、白色地を多く含む	NB/灰	内面UVカット、表面UVカット、外側UVカット	
89	4-18	SP000	本締縫	無	-	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地の、黒色地少々含む	NB/灰	内外両面UVカット、内面UVカット	
90	4-18	SP000	濃黒系	無	-	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、外側UVカット、耐候性計測C1	
91	4-18	SP004	本締縫	無	(4.0)	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
92	4-18	SP000	濃黒系	無	-	13.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、内面UVカット、表面UVカット	
93	4-18	SP000	上締縫	無	-	12.00	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-1mmの白色地の、黒色地少々含む	2019/11/26	表面UVカット、内面UVカット	
94	4-18	SP000	濃黒系	無	-	12.00	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
95	4-18	SP000	濃黒系	無	-	12.00	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
96	4-18	SP000	上締縫	無	-	12.00	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、口縫合部UVカット、内外両面UVカット	
97	4-18	SP000	濃黒系	無	(13.0)	3.4	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、口縫合部UVカット、白色の色を含む	
98	4-18	SP000	濃黒系	無	-	14.00	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-4~5mmの白色地、乳白色、薄黄色やや多め	NB/灰	表面UVカット、褐色少々含む、保護材付けて、保護材付けて上に貼付け付ける、色説明色付	
99	4-18	SP000	濃黒系	無	(13.0)	3.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
100	4-18	SP000	濃黒系	無	(13.0)	12.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、表面UVカット、内外両面UVカット	
101	4-18	SP000	濃黒系	無	(11.0)	3.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、口縫合部UVカット、白色の色を含む	
102	4-18	SP000	濃黒系	無	(11.0)	3.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、表面UVカット、内外両面UVカット	
103	4-18	SP000	濃黒系	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、内外両面UVカット	
104	4-18	SP000	濃黒系	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、内外両面UVカット	
105	4-18	SP000	濃黒系	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、内外両面UVカット	
106	4-18	SP000	濃黒系	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、内外両面UVカット	
107	4-18	SP000	濃黒系	無	-	11.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
108	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	1.7	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、表面UVカット、内外両面UVカット、1.7	
109	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	6.0	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、赤褐色やや多め	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット、1.7	
110	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	3.75	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
111	4-18	SP000	濃黒系	無	-	12.0	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
112	4-18	SP000	濃黒系	無	-	12.0	10.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
113	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	3.00	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
114	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	1.65	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
115	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	3.6	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	口縫合部UVカット、裏地UVカット	
116	4-18	SP000	濃黒系	無	(12.0)	3.4	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、褐色、真っ白、白色地、黒色地少々含む	2019/11/26	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
117	4-18	SP000	濃黒系	無	-	0.2	7.0	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	NB/灰	表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
118	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(14.7)	1.7	1.6	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26~2019/12/14に亘る	地主、上締縫ルーフ、下締縫	
119	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(14.0)	0.2	0.00	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット、1.7	
120	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(14.0)	0.2	0.00	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
121	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(14.0)	0.2	0.00	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
122	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(22.0)	0.2	0.00	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
123	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(13.0)	1.6	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地を多く含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
124	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(14.0)	1.65	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、赤褐色、真っ白、白色地、黒色地少々含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
125	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(13.0)	1.6	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、赤褐色、真っ白、白色地、黒色地少々含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
126	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(13.0)	1.6	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、赤褐色、真っ白、白色地、黒色地少々含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
127	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(13.0)	1.6	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、赤褐色、真っ白、白色地、黒色地少々含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	
128	4-18	SP000	濃黒系	土締縫	(13.0)	1.6	-	△2.0(横幅)	標準	△-0.5~1mmの白色地の、赤褐色、真っ白、白色地、黒色地少々含む	2019/11/26	地主UVカット、表面UVカット、裏地UVカット、内外両面UVカット	

番号	種類名	通称	種子	花被	果被	種子	花被	果被	特記事項(備考)	
117	4-18	S400	土蔵梅	梅	(14.0)	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ 以下の白紫色。葉、 $\phi 2mm$ 以下の緑色 枝葉半分	123914-4848美濃 葉被銀平伝、内蔵ナナ、直立上立ち上がる
118	4-18	S400	土蔵梅	梅	(12.0)	3.0	-	口鱗1/3 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の緑色の花被。各色、各色花被合む	123915-1595 葉被銀平伝、内蔵ナナ、立ち上がり内蔵、上葉
119	4-18	S400	土蔵梅	梅	(13.8)	3.05	-	口鱗3/4 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、青、薄紅 枝葉半分	123916-1473白日 葉被銀平伝、内蔵ナナ、上立ち内蔵
120	4-18	S400	土蔵梅	梅	(14.0)	3.1	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、葉色やや赤く 枝葉半分	123917-1422白日 葉被銀平伝、内蔵ナナ、立上立ち内蔵
121	4-18	S400	土蔵梅	梅	(14.0)	3.4	-	口鱗1/3 梅被	葉、 $\phi 1mm$ 以下の緑被頭丸	123918-1595 葉被銀平伝、内蔵ナナ、立ち上立ち内蔵
122	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.65	0.05	口鱗1/2 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の少花被合む	123919-1473白日 葉被ヘリナ、立上立ち内蔵
123	4-18	S400	徳富梅	梅	(14.0)	3.45	-	口鱗1/4 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色。葉被や少花被合む	123920-1595 内蔵銀平伝、内蔵ナナ、立ち上立ち内蔵、口被銀頭内
124	4-18	S400	徳富梅	梅	(14.0)	3.65	-	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、葉色やや赤く 枝葉半分	123921-1595 口被銀頭内、葉被銀平伝、色被は白色をすす
125	4-18	S400	徳富梅	梅	-	3.55	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の大花被の少花被合む	123922-1595 内蔵銀平伝、口被銀頭内
126	4-18	S400	徳富梅	梅	(14.0)	3.65	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色。葉被や少花被合む	123923-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内、葉被は白色をすす
127	4-18	S400	徳富梅	梅	-	3.15	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123924-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内、葉被は白色をすす
128	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(13.0)	1.05	-	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の白紫色。葉被や少花被合む	123925-1595 葉被銀平伝、口被銀頭内、内蔵ナナ、「白」
129	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(12.0)	0.95	-	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の白紫色。葉被や少花被合む	123926-1595 葉被銀平伝、立上立ち内蔵、口被銀頭内足、上葉
130	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(13.0)	3.0	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、葉被や少花被合む	123927-1595 葉被銀平伝、口被銀頭ナデ、葉被銀頭内足、「白」
131	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(13.0)	3.05	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、葉被や少花被合む	123928-1595 葉被銀平伝、口被銀頭ナデ、葉被銀頭内足
132	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(13.0)	3.65	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色。葉被や少花被合む	123929-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内、葉被は白色をすす
133	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	3.15	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123930-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内、葉被は白色をすす
134	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	2.45	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123931-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
135	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	3.25	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色。葉被や少花被合む	123932-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
136	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(15.0)	5.5	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、葉被や少花被合む	123933-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
137	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(14.0)	8.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123934-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
138	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(13.0)	3.65	-	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ 以下の白紫色の花被合む	123935-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
139	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	3.15	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉や枝葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123936-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
140	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	2.45	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123937-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
141	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	3.25	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123938-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
142	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(14.0)	5.5	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の大花被の白、葉被や少花被合む	123939-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
143	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	3.15	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123940-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
144	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(11.0)	3.45	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123941-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
145	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(14.0)	8.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123942-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
146	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	-	3.65	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123943-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
147	4-18	144004徳富梅	土蔵梅	梅	(14.0)	5.5	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ 以下の白紫色の花被合む	123944-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
148	4-18	S400	土蔵梅	梅	(11.0)	3.0	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123945-1595 葉被銀平伝、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、葉被銀頭内足、上葉
149	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123946-1595 葉被ヘリナ、内蔵ナナ
150	4-18	S400	土蔵梅	梅	(12.0)	3.05	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123947-1595 葉被ヘリナ、内蔵ナナ
151	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123948-1595 葉被ヘリナ
152	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.15	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123949-1595 葉被ヘリナ
153	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.65	(1.5)	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123950-1595 葉被ヘリナ
154	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123951-1595 葉被ヘリナ
155	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123952-1595 葉被ヘリナ
156	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123953-1595 葉被ヘリナ
157	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123954-1595 葉被ヘリナ
158	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123955-1595 葉被ヘリナ
159	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123956-1595 葉被ヘリナ
160	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123957-1595 葉被ヘリナ
161	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123958-1595 葉被ヘリナ
162	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123959-1595 葉被ヘリナ
163	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123960-1595 葉被ヘリナ
164	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123961-1595 葉被ヘリナ
165	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123962-1595 葉被ヘリナ
166	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123963-1595 葉被ヘリナ
167	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123964-1595 葉被ヘリナ
168	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123965-1595 葉被ヘリナ
169	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123966-1595 葉被ヘリナ
170	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123967-1595 葉被ヘリナ
171	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123968-1595 葉被ヘリナ
172	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123969-1595 葉被ヘリナ
173	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123970-1595 葉被ヘリナ
174	4-18	S400	土蔵梅	梅	-	3.25	-	口鱗1/6 梅被	葉、 $\phi 1mm$ の白紫色の花被合む	123971-1595 葉被ヘリナ

番号	種類名	連携	性別	年齢	基準	最大幅	周囲	脚の長さ	脚の幅	頭部	頭部	地上	色彩	特徴(参考用)
175	4-12	SAR	土蜘蛛	土	基(125)	幅14	丸頭0.4	-/2.3	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の丸頭と細頭	10191-21黒裏	全世、片側脚が大き	
176	4-12	SAR	土蜘蛛	土	基(3.8)	幅16	丸頭0.6	-/2.3	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の丸頭と細頭	10191-22黒裏	全世、片側脚が大き	
177	4-12	SAR	土蜘蛛	土	基(7.5)	幅18	丸頭0.6	-/1.7	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の丸頭と細頭	10191-23黒と10191-22黒	全世	
178	4-12	SPI01	深海蟹	深	-	0.34	-	-	-	頭部	頭, $\phi 1-1.1mm$ 以下の丸形の白色を含む	ND-黒	表面繊維の少タキ、内面同心円状模様	
179	4-12	SPI02	深海蟹	深	(18.0)	3.5	-	10191-1	-	脚部	脚部, $\phi 1.5mm$ 以下の白色を含む	10191-31黒裏	黒帯 \pm 10mm、内面白目模様	
180	4-12	SPI03	土蜘蛛	土	(12.3)	2.85	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の丸頭と細頭	10191-22黒裏	黒裏模様不規、内面白ナメ	
181	4-12	SPI04	深海蟹	深	(15.4)	8.45	-	10191-1	-	脚部	脚, $\phi 6mm$ 以下の白色を含む	23091-1黒と23091-1黒	黒裏あり、表面ナメ、内面墨背景、内面白目模様、口蓋黒0.6mm、触毛分離	
182	4-12	SPI179	土蜘蛛	土	16.4	2.5	-	10191-4	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-4	黒裏へ対し、体表面的、内面ナメ、尾足	
183	4-12	SPI180	土蜘蛛	土	2.8	2.5	-	10191-10	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-31黒と10191-4	黒裏あり、表面ナメ、内面中央黒ムラ、内面で立ち止り、口蓋黒0.5mm	
184	4-12	SPI17	深海蟹	深	-	0.65	(16.0)	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の丸形の白色を含む	ND-黒	黒裏あり、表面ナメ、内面白目ナメ、触毛分離	
185	4-12	SPI182	深海蟹	深	(14.0)	5.15	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の丸形の白色を含む	ND-黒	黒裏あり、表面ナメ、内面白目ナメ、触毛分離	
186	4-12	SPI13	土蜘蛛	土	(18.0)	3.7	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1-1.5mm$ の白色、黄色、純白と混合	10191-4黒	黒裏模様平均、純白脚毛上げ、内面黒ナメ、1尾	
187	4-12	SPI19	深海蟹	深	-	0.35	(10.0)	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏X-版、内面白目模様	
188	4-12	SPI19	土蜘蛛	土	-	0.90	-	-	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-4黒裏	黒裏あり、表面ナメ、内面中央黒ムラ、内面で立ち止り、口蓋黒0.5mm	
189	4-12	SPI07	深海蟹	深	-	0.18	10.0	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏あり、表面ナメX-版、尾足黒0.6mm	
190	4-12	SPI07	土蜘蛛	土	-	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	口蓋黒模様的、表面黒裏	
191	4-12	SPI02	深海蟹	深	-	1.05	-	10191-10	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒リップ	黒裏、前脚片	
192	4-12	SPI02	深海蟹	深	-	0.25	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色、白色化	ND-黒	表面X-版、内面白目模様	
193	4-12	SPI02	深海蟹	深	-	0.30	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色、白色化	10191-5黒裏	黒裏X-版、触毛分離	
194	4-12	SPI02	深海蟹	深	-	1.05	10.0	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏へ対し、内面黒ナメ、尾足黒分離X	
195	4-12	SPI07	土蜘蛛	土	-	1.05	-	-	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	黒裏模様平均、口蓋黒0.6mm、触毛分離	
196	4-12	SPI07	深海蟹	深	-	1.05	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様的、表面黒裏	
197	4-12	SPI05	深海蟹	深	(24.5)	21.0	10191-1	-	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色、白色化	ND-黒	黒裏あり、表面白目模様	
198	4-12	SPI15	土蜘蛛	土	-	0.15	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色、白色化	10191-6	10191-7黒裏	
199	4-12	SPI177	深海蟹	深	-	0.25	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色、白色化	ND-黒	内面黒模様X-版	
200	4-12	SPI11	深海蟹	深	-	0.25	(14.0)	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	黒裏模様平均、口蓋黒0.6mm	
201	4-12	SPI17	土蜘蛛	土	(11.0)	1.10	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	黒裏模様平均、口蓋黒0.6mm、1尾	
202	4-12	SPI10	土蜘蛛	土	(13.0)	0.95	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色、黑色、黑色化	10191-6	黒裏模様平均、触毛分離	
203	4-12	SPI15	深海蟹	深	-	0.25	11.0	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色、白色化	ND-黒	黒裏模様平均、内面白目模様	
204	4-12	SPI175	深海蟹	深	-	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、触毛分離	
205	4-12	SPI177	土蜘蛛	土	-	1.05	(12.4)	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	黒裏模様平均、口蓋黒X-版	
206	4-12	SPI09	土蜘蛛	土	-	0.15	10.0	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	黒裏模様平均、内面ナメ、1尾	
207	4-12	SPI19	土蜘蛛	土	(18.0)	3.0	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	黒裏模様平均、口蓋黒0.6mm、1尾	
208	4-12	SPI19	深海蟹	深	-	0.25	(13.0)	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、口蓋黒X-版	
209	4-12	SPI19	深海蟹	深	(14.0)	2.5	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-7黒裏	黒裏模様平均、口蓋黒X-版、内面白目模様	
210	4-12	SPI09	深海蟹	深	(15.0)	2.85	(19.0)	10191-1	-1.7	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	ヘラナメ、脚毛分離、脚毛	
211	4-12	SPI117	土蜘蛛	土	-	0.15	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒	口蓋直下に黒目、黑色ナメX-版、口蓋ナメ、1尾	
212	4-12	SPI144	深海蟹	深	-	1.05	0.65	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏ナメX-版、内面白目ナメX-版、触毛分離	
213	4-12	SPI147	深海蟹	深	-	1.05	0.95	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、内面白目ナメX-版	
214	4-12	SPI152	深海蟹	深	-	0.15	(12.0)	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-7黒裏	黒裏模様平均、每脚直下に黒目、外内脚白模様X-版、触毛分離	
215	4-12	SPI117	土蜘蛛	土	(11.0)	0.55	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色、黑色、黑色化	ND-黒	黒裏模様平均、1尾	
216	4-12	SPI185	深海蟹	深	-	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、尾足黒0.6mm	
217	4-12	SPI185	土蜘蛛	土	-	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、内面ナメ、内面白ナメ	
218	4-12	SPI187	深海蟹	深	-	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、内面白目ナメ	
219	4-12	SPI188	深海蟹	深	-	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、内面白目ナメ	
220	4-12	SPI194	土蜘蛛	土	(14.0)	2.45	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の多毛頭、白色化	10191-31黒と10191-1	黒裏模様平均、内面ナメ、内面白ナメ、1尾	
221	4-12	SPI181	深海蟹	深	(14.0)	3.05	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒裏	黒裏模様平均、内面白目ナメ	
222	4-12	SPI181	深海蟹	深	-	0.15	0.75	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の黑色化	ND-黒	黒裏模様平均、口蓋ナメ、触毛分離	
223	4-12	SPI181	深海蟹	深	-	0.85	0.85	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、触毛分離	
224	4-12	SPI180	土蜘蛛	土	(14.0)	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の多毛頭、白色化	10191-31黒と10191-1	黒裏模様平均、内面ナメ、内面白ナメ	
225	4-12	SPI181	土蜘蛛	土	(14.0)	3.15	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒裏	黒裏模様平均、内面白目ナメ、1尾	
226	4-12	SPI181	深海蟹	深	-	0.15	0.75	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の黑色化	ND-黒	黒裏模様平均、口蓋ナメ、触毛分離	
227	4-12	SPI181	深海蟹	深	-	0.85	0.85	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、触毛分離	
228	4-12	SPI180	土蜘蛛	土	(14.0)	0.65	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の多毛頭、白色化	10191-5黒裏	黒裏模様平均、触毛分離	
229	4-12	SPI182	土蜘蛛	土	(14.0)	3.25	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の多毛頭、白色化	10191-5黒裏	黒裏模様平均、内面白目ナメ、1尾	
230	4-12	SPI182	深海蟹	深	(14.0)	2.95	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	黒裏模様平均、每脚直下に黒目、内面脚白模様	
231	4-12	SPI181	深海蟹	深	-	0.85	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	ND-黒	内面脚白模様平均、口蓋黒0.6mm	
232	4-12	SPI181	土蜘蛛	土	(14.0)	3.75	-	10191-1	-	頭部	頭, $\phi 0.5-1mm$ 以下の白色を含む	10191-5黒裏	黒裏模様平均、口蓋黒0.6mm	

番号	種類別	種構	種構	日程	基準	最大径	通過	持続	始点	終点	特記事項(通考)		
521	E-1E	白毛唐	五	平互	高11.85	幅2.14	幅2.14(2.14)	-1/18	通過	中や細い、♂♂は1-2mmの白色毛を含む	10/18/18(1)見出	亜寒帯平行林带、西日本(福島県、宮城県)	
524	E-2E	SP55	瓦葉	四	(15.0)	0.45	(0.15)	-	口端1/4	葉	細、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(2)見出	根被葉質、紅葉色
525	E-2E	SP56	土蔵葉	四	-	0.45	-	-	口端1/10	葉	細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(3)見出	根被葉質
526	E-2E	SP57	土蔵葉	三	(0.8)	1.4	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉と花	10/18/18(3)見出	セイシキ	
527	E-2E	SP58	土蔵葉	四	(0.8)	1.15	-	0.25口1/10	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉と花	10/18/18(4)見出	セイシキ、口端葉質は丸みのあるもの、葉質	
528	E-2E	SP59	土蔵葉	三	(0.2)	1.6	-	0.25口1/4	葉	細、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(5)見出	セイシキ、口端葉質は丸みのあるもの、葉質	
529	E-2E	SP60	土蔵葉	四	(12.0)	4.85	-	0.25口1/3	葉	細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(6)見出	通風良好、中央から内側にしがらき立つ形、口端葉質外舟、先端	
530	E-2E	SP61	須葉	四	(14.0)	4.2	-	0.25口1/3	葉	細、♂♂は3mmの大枝の葉、♂♂は1mm小枝葉	10/18/18(7)見出	通風良好、内側は直角ナメ、葉表面銀葉化	
531	E-2E	SP62	須葉	四	-	2.45	-	-	口端1/10	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉と花房多く含む	10/18/18(8)見出	通風良好
532	E-2E	SP63	白毛唐	四	-	2.45	-	0.25口1/5	葉	細	10/18/18(9)見出	内側葉質丸形	
533	E-2E	SP64	瓦葉	四	-	3.6	-	-	口端1/10	葉	細、♂♂は1mm以下の白色地帯	10/18/18(10)見出	通風良好
534	E-2E	SP65	土蔵葉	四	(2.7)	1.45	0.82	-	0.25口1/4	葉	細い、♂♂は1-2mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(11)見出	通風良好
535	E-2E	SP66	白毛唐	四	-	3.25	(15.0)	0.85	口端1/10	葉	細	10/18/18(12)見出	大半が倒伏
536	E-2E	SP67	須葉	四	(0.4)	14.15	(19.0)	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(13)見出	口端部倒下に沿うて、葉表面、葉裏合間に、輪葉無数の可動性葉片
537	E-2E	SP68	白毛唐	四	(0.4)	20.14	(19.0)	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉と花房多少含む	10/18/18(14)見出	通風良好、葉、地表葉質は直角
538	E-2E	SP69	須葉	四	-	11.85	(11.8)	0.85	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉と花房多少含む	10/18/18(15)見出	通風良好で凹形、葉白毛由来、内側葉質丸形
539	E-2E	SP70	須葉	四	-	3.25	(2.75)	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面や少し赤	10/18/18(16)見出	通風良好でアズマツ、葉白毛由来、内側葉質丸形
540	E-2E	SP71	土蔵葉	四	-	2.75	-	-	0.25口1/5	葉	細い、♂♂は1mmの大枝の葉と花房多く含む	10/18/18(17)見出	通風良好でアズマツ、葉白毛由来、内側葉質丸形
541	E-2E	SP72	白毛唐	四	(0.6)	0.95	(2.0)	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉と花房多少含む	10/18/18(18)見出	内側葉質丸形、内側は3-4mmの葉と輪葉無数
542	E-2E	SP73	土蔵葉	三	(0.6)	1.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(19)見出	セイシキ、葉表面直角
543	E-2E	SP74	須葉	四	(0.7)	2.0	-	-	0.25口1/4	葉	細やか細いに近い、葉端は鋸歯状の時に凹形	10/18/18(20)見出	通風良好
544	E-2E	SP75	須葉	四	-	18.6	(18.3)	0.85	0.25口1/4	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(21)見出	通風良好で凹形、内側葉質直角
545	E-2E	SP76	土蔵葉	四	(2.8)	17.45	(25.0)	-	0.25	葉	細やか細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面や少し赤	10/18/18(22)見出	口端直下に凹形、外側、ナダ、内ダ、ナダ、葉上縁直角
546	E-2E	SP77	瓦葉	四	(18.25)	19.45	(25.0)	-	0.25口1/4	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(23)見出	葉上縁直角、葉表面直角
547	E-2E	SP78	土蔵葉	四	-	1.35	(18.0)	0.85	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1-2mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(24)見出	通風良好で凹形、葉表面直角
548	E-2E	SP79	土蔵葉	三	(0.6)	1.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(25)見出	セイシキ、葉表面直角
549	E-2E	SP80	瓦葉	四	(0.7)	2.0	-	-	0.25口1/4	葉	細やか細いに近い、葉端は鋸歯状の時に凹形	10/18/18(26)見出	通風良好で凹形、内側は3-4mmの葉と輪葉無数
550	E-2E	SP81	須葉	四	-	3.15	-	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(27)見出	口端部直角地帯、葉は2-3色を呈す
551	E-2E	SP82	須葉	四	-	3.6	-	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(28)見出	口端部直角地帯、葉は2-3色を呈す
552	E-2E	SP83	土蔵葉	四	(2.8)	17.45	(25.0)	-	0.25	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(29)見出	葉上縁直角、葉表面直角
553	E-2E	SP84	土蔵葉	三	-	0.25	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(30)見出	内側葉質丸形、口端葉質直角
554	E-2E	SP85	土蔵葉	四	-	3.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(31)見出	通風良好で凹形、内側葉質丸形
555	E-2E	SP86	須葉	四	-	3.15	-	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(32)見出	口端部直角地帯、葉は2-3色を呈す
556	E-2E	SP87	須葉	四	-	3.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(33)見出	葉上縁直角、葉表面直角
557	E-2E	SP88	土蔵葉	四	-	3.25	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1-2mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(34)見出	葉上縁直角、葉表面直角
558	E-2E	SP89	須葉	四	-	3.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(35)見出	内側葉質丸形、内側は直角ナメ
559	E-2E	SP90	土蔵葉	三	(0.8)	1.25	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(36)見出	通風良好で凹形、内側は直角ナメ
560	E-2E	SP91	須葉	四	-	3.15	-	-	0.25口1/5	葉	細、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(37)見出	口端部直角地帯、葉は2-3色を呈す
561	E-2E	SP92	須葉	四	-	3.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mmの大枝の葉、葉表面は直角地帯	10/18/18(38)見出	口端部直角地帯、葉は2-3色を呈す
562	E-2E	SP93	土蔵葉	四	-	3.25	0.95	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(39)見出	葉上縁直角、葉表面直角
563	E-2E	SP94	須葉	四	(14.0)	12.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(40)見出	内側葉質丸形、内側は直角ナメ
564	E-2E	SP95	須葉	四	(14.0)	0.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(41)見出	内側葉質丸形、内側は直角ナメ
565	E-2E	SP96	土蔵葉	三	-	0.25	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(42)見出	通風良好で凹形、内側葉質丸形
566	E-2E	SP97	須葉	四	-	3.6	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(43)見出	内側葉質丸形、内側は直角ナメ
567	E-2E	SP98	土蔵葉	四	(1.8)	1.75	-	-	0.25	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(44)見出	内側葉質丸形
568	E-2E	SP99	須葉	四	(11.0)	5.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(45)見出	内側葉質丸形
569	E-2E	SP100	須葉	四	(14.0)	12.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(46)見出	内側葉質丸形
570	E-2E	SP101	須葉	四	(11.0)	8.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は3mmの大枝の葉、葉表面、乳白色地帯	10/18/18(47)見出	内側葉質丸形
571	E-2E	SP102	須葉	四	(0.8)	2.55	0.95	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(48)見出	通風良好、直角形
572	E-2E	SP103	須葉	四	(0.8)	2.4	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(49)見出	直角形
573	E-2E	SP104	須葉	四	-	1.5	(0.95)	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(50)見出	直角形
574	E-2E	SP105	須葉	四	(14)	2.35	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(51)見出	直角形
575	E-2E	SP106	須葉	四	(16.0)	4.85	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(52)見出	直角形
576	E-2E	SP107	須葉	四	-	0.85	(11.0)	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(53)見出	直角形
577	E-2E	SP108	土蔵葉	三	(3.6)	1.45	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(54)見出	直角形
578	E-2E	SP109	須葉	四	(18.0)	3.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(55)見出	直角形
579	E-2E	SP110	須葉	四	(18.0)	0.95	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(56)見出	直角形
580	E-2E	SP111	須葉	四	(15.0)	2.05	-	-	0.25口1/5	葉	細やか細い、♂♂は1mm以下の大枝の葉	10/18/18(57)見出	直角形

番号	種群名	種類	種別	口幅	最高	最大幅	通路	胸外套	体感	鰓	毛膜	特徴(参考)備考)
SB-1	近海内	-	深水群	無	11.8	2.0	12.7	103/14	側面	♂0.5~1mmの白色、白色歩道に青む	MF/良品	近海へ少び、内外青斑和ナメ
SB-2	近海内	-	深水群	無	-	2.05	(16.1)	♀0.5(通路)1/3	側面	♂0.5~3mmの淡青色歩道・青む	MF/良品	近海内少び、口端褐色上方へ延び、内外青斑和ナメ、青斑跡へ、側方A
SB-3	近海内	-	深水群	無	(18.4)	12.25	21.4	(11.1)1/3	側面	♂~3mmの大の白、黑色點少青む	MF/1/良品	近海内少び
SB-4	近海内	-	上部群	無	-	2.0	-	♂手(1/1)	側面	♂~3mmの大の白、歩道青色や多(青む)	MF/1/良品	優SLC型の近海、着手(1/1)青む
SB-5	近海内	-	上部群	無	(18.4)	9.85	(18.0)	-1/4	側面	♂~4mmの大の白、歩道青色や多(青む)	MF/1/0/1/1/1/1/1	内斑ナメ、外斑濃度

番号	種群名	種類	種別	口幅	最高	最大幅	通路	胸外套	体感	鰓	毛膜	特徴(参考)備考)
SB-1	東洋熱帯	-	熱帶	赤褐色	(15.0)	4.5	-	0.8(口端部)1/35	側面	側斑銀白(淡紅)	暖北洋、赤色青斑銀色、赤色點少銀跡(1/6)	
SB-2	東洋熱帯	-	熱帶	熱帶	(28.1)	14.3	(29.0)	(0.4)口端1/35、腹	側面	♂0.5~5mmの白色、黄色歩道中青む	MF/良品、2.0(95.2)に近い赤斑	次(1/6)赤・本種、口端部は上方が赤、側面の種は目立たない、外斑(2/6)青
SB-3	東洋熱帯	-	熱帶	熱帶	(28.0)	13.5	(29.0)	0.7(95.1)1/35	側面	青斑、♂1mmの大の白色和少、♀~2mmの大の赤	MF/良品	次(1/6)赤・本種、口端部は上方が赤、内斑(2/6)青少つ、外斑(1/6)赤
SB-4	東洋熱帯	-	熱帶	熱帶	(28.4)	6.5	(28.0)	-口端1/4	側面	青	MF/良品	口端部は上方に立ち上り、内部は丸く赤める

